

只見短歌会

令和七年十月詠草

猫じやらし嫌がらないで時折に風に踊れば笑顔になれり

目黒 富子

それぞれに事情違ひし仲間なり一つの事に集ふ楽しみ

関谷登美子

秋冷に温もり探す三歳児こたつに潜り息ほころばす

立花 奏音

窓開けて寝れば聞こゆるコホロギの声を飼ひ猫共に聞きをり

新国由紀子

オルゴールのやさし音色に目を閉じてしばし聞きあて癒されてをり

渡部ヨリ子

只見俳句会

十月定例会

秋うらら日向は少しひんやりと
パソコンはうんともすんとも芋の秋

都

仏壇に密談ありて長き夜
稲刈つて暮そめし道人帰る

味代子

シジミ蝶二匹離れず鎌の先
小豆殻まるき背中のかくるほど

一 恵

二階窓熊の出没見張り用
銀杏を都の妻に送る人

真理子

秋雲がふんわり浮ぶ風そよぎ
老いを知り老いを楽しみ秋を生き

睦 子

座敷の戸開けしままなる無月かな
老いもまた一歩くや秋の暮

恒 夫

心地よき風やよろこぶ児のあんよ
栗拾う友のかん声聞きながら

礼

手の甲の年寄ぼくろとろろ汁
菊花展始まる気配三の丸

修 一

秋時雨ダムの繁栄今は昔
行く道に覚悟ありしや曼珠沙華

信